

『オーケストラ指揮者の多元的知性研究

～場のリーダーシップに関するメタ・フレームワークの構築を通して～』

大学教育出版、2011年1月

本著は、宇田川氏が博士學位論文としてまとめられたものをベースに書かれたものである。さらに、その論文は、既に評価され(独)日本学術振興会平成22年度科学研究費を受けている。

内容は、9つの章に分けて論述され、それぞれの章末に「小括」という項が設けられてその内容を再度まとめて論述されている。

そこで、その「小括」の項を基に各章の概略を紹介すると次のようである。

第1章

「指揮者のリーダーシップ研究の目的」について、「精神論」を超えた「知的創造リーダーシップ」への「鍵」が得られるはずという仮説を立て、「なぜオーケストラ指揮者のリーダーシップ研究か」を3つの理論的根拠を示して論述、さらに「クリエイティブ資本論」を基にオーケストラこそ真の「クリエイティブ・クラス」集団だと述べている。

そして、この著書の全体構成は、下記のようなことを示している。

「レビュー・観察」→「概念化」
(第2,3章) (第4,5,6章)
→「事例研究」→「発展」
(第7,8章) (第9章)

第2章 指揮者とオーケストラに関する既存理論レビュー

テーマである多元的知性とオーケストラ組織に関する既存理論として「多重知能(MI)理論」「リ

ーダーシップ論」等々諸理論を概観して、指揮者は単なる「スーパーマン」ではなく自分自身の多様な知的特性を、ある種のモデルによって複合的・多面的に活用している。しかし、それらの諸理論は互いに関連性が薄く、「指揮者のリーダーシップ」としてのまとまった知見を得るには、それらの諸理論を統合するメタ・フレームワークが不可欠だと述べている。

第3章 オーケストラ指揮者リーダーシップの特殊性

リーダーシップ論の新たな可能性を探るために、指揮者と楽団員とで構成する「オーケストラ」の特殊性の分析をし、「指揮者」の存在意義や特殊性を述べている。

指揮者の任務として「目に見える任務」(練習も含むコンサートの指揮)と「目に見えない任務」(作品の解釈やプログラミンなど)とがあるが、中でも「リハーサルの指揮と進行」は、楽団員と指揮者との直接的な「場」として重要であり、指揮者はそのキャリア形成に他に類を見ない特殊な存在であること。さらに指揮者の特殊性として「短期的なリーダーシップに対応するリハーサル場」と「中期的なリーダーシップに対応するキャリア形成」という対照的な2つの視点が得られたと述べている。

第4章 創造の場としてのリハーサル場のモデル

オーケストラ特性分析と楽団員の意識分析から、指揮者と楽団員



との知識構造プロセスを「プログラム作成」「リハーサル・プロセス」「コンサート本番」の3つに分けて、それぞれ双方からのフローチャートを作成して「リハーサル・プロセス」がオーケストラ全体の合意が形成されるための重要な「場」であることが分かった。そこで楽員側から見たリハーサル・プロセスを①指揮者への信頼、②演奏努力、③指揮への注意、④エラーの容認、⑤演奏全体を調和させようとする気持ち、⑥判断保留の気持ち、⑦回顧(過去のことを振り返る)的に判断した時の演奏評価という7つに分解し、「因果モデル」を提示して論述している。

第5章 リハーサル場の多元的知性モデル

オーケストラ指揮者の「多元的知性」を導くために、ガードナーの多重知能理論から「禅僧型」「建築家型」「仕掛人型」「教育者型」「外交官型」という5つの「理念型」を抽出し、指揮者がその多元性をどのように戦略的に生かしているかを事例によって述べている。

さらに、指揮者は、楽員との双方向的な創造の場である「リハー